



FUKUSHIMA 市民インタビュー

このコーナーでは、福島市のさまざまな分野で活躍する人や団体を紹介します。今回は、県内で初めて一般財団法人全日本野球協会(BFJ)の国際審判員試験に合格し、これから世界を股にかけての活躍が期待される福島県野球連盟東北支部の高橋進也さんにインタビューしました。



福島県野球連盟東北支部
高橋 進也さん

3月中旬〜11月中旬に、小学生から中学生、高校生、そして社会人の試合で県内外問わず審判をしています。昨年は東京ドームで、アマチュア野球の最高峰である都市対抗野球大会でジャッジす

🐰 活動内容は？

🐰 審判員を目指したきっかけは？
高校3年の時、けがで最後の大会に出られず、私の高校野球は不完全燃焼で終わりました。社会人になってからもそのことが忘れられず、何かの形で野球に携わりたいという思いから、28歳の時、県野球連盟東北支部に志願して審判員になりました。そのうち、甲子園球場や東京ドームなど、憧れの地でのジャッジを思い描くようになり、審判員として活動の幅を広げるため、国際審判員を目指して認定試験に挑みました。

🐰 大切にしていることは？
試合は、休日だけでなく平日もあります。週末、家にいることが少ない私に、妻や子どもたちは寂しいと言わず「がんばって」の言葉を掛けてくれます。休日、平日問わず、試合に送り出してくれる家族、また勤務先の会社の皆さんには感謝の気持ち

🐰 やりがいは？
大きな大会でのジャッジは名譽なことですが、一番はどんな試合でも大好きな野球を誰よりも近くで見られて、それに携われることです。全力でプレーしている選手たちに対して、私も全力でジャッジをする。「審判は100%正しいジャッジをするのが当たり前」が自分の信条で、そのために野球規則を読み込み「ストライク」などのコールや動きに磨きをかけなければと日々感じています。

🐰 今後の展望は？
8月にパナマで開催されるWBSC U-15野球ワールドカップで、海外で行われる国際大会に初めて臨みます。選手として抱いていた夢は叶わなかったけれど、審判員として大きな舞台に立てます。県野球連盟では、審判員が不足しているのが現状です。国際大会で活躍する姿を知ってもらうことで、審判員に興味をも増えてくれたらうれしいです。

🐰 やりがいは？
大きな大会でのジャッジは名譽なことですが、一番はどんな試合でも大好きな野球を誰よりも近くで見られて、それに携われることです。全力でプレーしている選手たちに対して、私も全力でジャッジをする。「審判は100%正しいジャッジをするのが当たり前」が自分の信条で、そのために野球規則を読み込み「ストライク」などのコールや動きに磨きをかけなければと日々感じています。



▲都市対抗野球大会でジャッジする高橋さん

🐰 やりがいは？
大きな大会でのジャッジは名譽なことですが、一番はどんな試合でも大好きな野球を誰よりも近くで見られて、それに携われることです。全力でプレーしている選手たちに対して、私も全力でジャッジをする。「審判は100%正しいジャッジをするのが当たり前」が自分の信条で、そのために野球規則を読み込み「ストライク」などのコールや動きに磨きをかけなければと日々感じています。

🐰 今後の展望は？
8月にパナマで開催されるWBSC U-15野球ワールドカップで、海外で行われる国際大会に初めて臨みます。選手として抱いていた夢は叶わなかったけれど、審判員として大きな舞台に立てます。県野球連盟では、審判員が不足しているのが現状です。国際大会で活躍する姿を知ってもらうことで、審判員に興味をも増えてくれたらうれしいです。

🐰 やりがいは？
大きな大会でのジャッジは名譽なことですが、一番はどんな試合でも大好きな野球を誰よりも近くで見られて、それに携われることです。全力でプレーしている選手たちに対して、私も全力でジャッジをする。「審判は100%正しいジャッジをするのが当たり前」が自分の信条で、そのために野球規則を読み込み「ストライク」などのコールや動きに磨きをかけなければと日々感じています。



We Love ♡ ふくしま！

第6回『夏祭り』

いよいよ夏、夏祭りの季節です。ウキウキしますねえ。お祭りは参加するもの。参加してこそ本当の面白さが分かるし、仲間と盛り上がった後の充実感は何とも言えません。私は、小さい頃から祭り好き。赴任した先々で「徳島の阿波踊り」「長崎の精霊流し」「岡山のはだか祭り」など全国的に有名なお祭りを体験してきました。福島市でも、稲荷神社例大祭、金沢の羽山ごもり、信夫三山眺まいりと、大いに楽しんでます。一方でお祭りは、地域活性化や観光の資源として重要性を増してきました。東北6県都の夏祭り動員数(平成29年)を見ると、青森ねぶた祭は282万人、次いで仙台七夕まつり178万人、盛岡さんさ踊り133万人、秋田竿燈まつり131万人、山形花笠まつり99万人と続き、福島わらじまつりは最少の28万人。自分たちの満足、誇りが一番と言っても、ちょっと寂しい結果です。

地方創生に各地が鎬を削る中、福島市ならではの強いアピールが必要ではないでしょうか。また、観るより体験。参加を促す一層の工夫も求められます。今年6月盛岡で開催された東北絆まつり。わが「わらじまつり」は、初めて大わらじに人を乗せ、金わらじも登場。ダイナミックに回転し、観衆を大いに沸かせました(私も大わらじを担ぎ、上にも乗らせていただきました)。わらじまつり50周年を迎える来年、東北絆まつりは福島市開催の見通し。わらじまつりのパワーアップも検討されています。東京2020オリンピック・パラリンピックの開会式などで、東北絆まつりの披露が実現すれば、わらじまつりの雄姿が全世界へと放映されます。私たち市民も、わらじまつりに積極的に参加・熱狂し、福島から感謝と元気を全世界に発信していきましょう。



▲東北の誇りと絆を全国・全世界に示した東北絆まつり2018盛岡での大わらじ

福島市長 木幡 浩